

# とちぎの人口

## ～人口減少時代を迎える～

明治44年に100万人、平成9年に200万人と増加してきた本県の人口ですが、平成18年には初めての自然減（出生数＜死亡数）を伴う減少に転じ、いよいよ人口減少局面を迎えたと報道されました。しかし、平成19年には社会増（転入数＞転出数）が自然減を補う形でわずかながら再び増加し、ピーク時には及ばないものの、前年を上回る水準で推移しています。全国の3分の2の道府県で人口減少が続く中、今のところ、本県は人口を維持している数少ない県の一つであると言ってよいでしょう。

人口減少時代のキーワードとして「少子化」が挙げられます。本県も例外ではなく、深刻な状況に変わりはありませんが、結婚・出産期の若い世代が多い人口構成であるため、人口千人あたりの出生数、婚姻数はともに全国上位にあります。年齢構成の影響を受けない合計特殊出生率で比較しても関東地方で最も高く、現在の本県の出生力は全国水準以上であることが分かります。

また、全国的に「少子化」とともに「小家族化」が進行している中、本県は世帯あたりの人員が多く、三世帯同居率は全国平均を5ポイント以上上回っています。

三世帯同居の多い地域は家族の育児支援を受けやすいため、出生率が高いと言われています。社会増をもたらす本県の豊かで安定した雇用・経済基盤とともに、子どもを生育しやすい環境も人口減少を押しとどめる背景になっていると推測されます。

今後50年で日本の人口は3割減少すると予測されています。本県の人口指標は、人口減少時代といわれる中で活力と家族の絆の強さを示していますが、今後はそれをどのように維持していくかが課題となるでしょう。

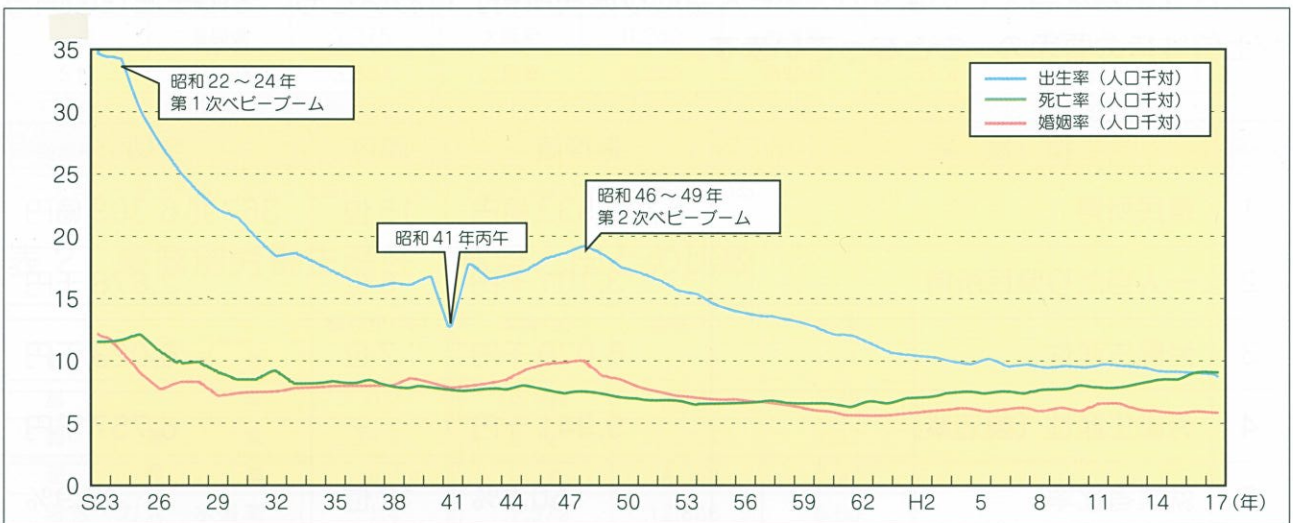
指標名		指標値	順位	全国
1	総人口（H18）	201万5千人	20位	1億2,777万人
2	人口千人あたりの出生数（H18）	8.9	8位	8.7
3	人口千人あたりの婚姻数（H18）	5.7	10位	5.8
4	合計特殊出生率（H18）	1.40	16位	1.32
5	生産年齢（15～64歳）人口割合（H18）	66.0%	8位	65.5%
6	一般世帯平均人員（H17）	2.81人	13位	2.55人
7	三世帯同居率（H17）	14.3%	14位	8.6%
8	高齢単身世帯の割合（H17）	5.87%	43位	7.88%

※1・5 推計人口（総務省統計局）、2～4 人口動態統計（厚生労働省）、6～8 国勢調査（総務省統計局）

図1 本県の人口の推移と見通し



図2 本県の出生率・死亡率・婚姻率の推移



**トピックス**

**—丙午（ひのえうま）迷信—**

過去の日本の出生率を見ると、昭和41年が極端に低くなっていることが分かります。この年は60年に一度巡ってくる干支のひとつである「丙午（ひのえうま）」にあたり、「丙午生まれの女性は気性が激しい」といった迷信から、全国的に出産を避ける人が多かったためと考えられています。当時は高度経済成長期にもかかわらず、大方の予想に反し、明治39年の丙午より出生率の落ち込みがずっと大きかったため、識者を驚かせたといえます。

本県でも、昭和41年の出生数は前年より7千人も少なく、翌年は9千人増加するという特異な現象が起きました。

次回の「丙午」は2026年です。迷信は出生率に影響を及ぼすでしょうか。

※人口動態統計（厚生労働省）